

# 雑司が谷旧宣教師館だより

第 65 号

2020年3月13日

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5 TEL/FAX 03-3985-4081

## 旧宣教師館の所蔵写真

本誌 2・3 面で秋の歴史文化講座について取り上げたので、それに関連して当館で収集した写真の特徴について取り上げたいと思います。

当館の写真は、マッケーレブと同宗派の野村基之氏が調査で収集した写真が多数を占めます(野村氏については、宣教師館だより 64 号も併せてご覧ください)。野村氏はマッケーレブの親族のほか、マッケーレブと同宗派の宣教師に育てられた日本人や、マッケーレブが開校した雑司ヶ谷学院の元学生、雑司ヶ谷幼稚園の卒園者などを訪ね、収集しました。

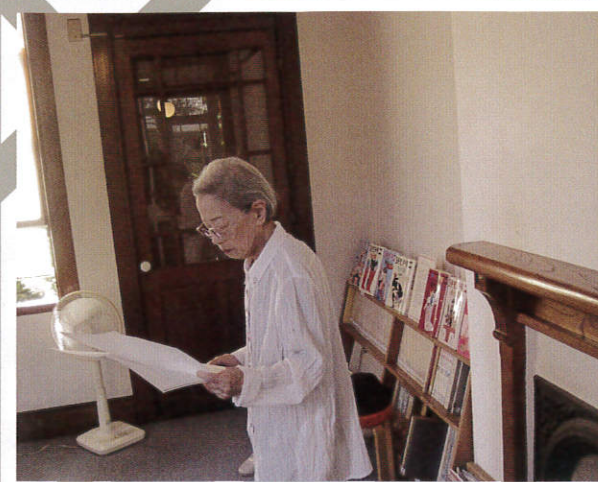
さて、当館に住んでいたマッケーレブの写真が収集されているのは勿論のこととして、実は同宗派の宣教師たちが写っている写真も多く収集されています。これらを所持していたのは、宣教師たちに育てられた日本人や、宣教活動を補佐した日本人たちです。写真は各教会の集合写真のほか、プライベートで日本人の知人と会った時の写真など、バリエーションも豊かです。

このように、同宗派といえども他の宣教師の写真が多数、当館に保管されているのは、収集者である野村氏や調査に応じた人々が、キリスト教を伝道した先人を顕彰したい思いがあったからだと思われます。



▲左の写真の中央が吉祥寺や田無を中心に活動していたリリー・サイパート。右の写真の前列右から7番目が千興津に教会を建てたサラ・アンドリュース。教会や周囲の人々との集合写真や日本での生活の様子が窺えます。

## 『赤い鳥』のおはなし会が200回を迎えます



▲小森香子さん

雑司が谷旧宣教師館では、毎月第1土曜日に詩人の小森香子さんをお招きし、「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会」を開催しています。

『赤い鳥』とは、大正時代に児童文学の質の低さを嘆いた鈴木三重吉によって作られた児童雑誌で、1918(大正7)年に発刊されました。

実はこの雑誌は、三重吉の住居があった北豊島郡高田村(現在の豊島区目白)が発刊の地です。当館は豊島区の施設であること、またマッケーレブが幼児教育に携わっていたこともあり、『赤い鳥』の復刻版を配架し、全巻閲覧できるようになっています。

小森さんは幼少期から『赤い鳥』をはじめとした文学に親しんでこられたこともあり、2003年から当館で『赤い鳥』の読み聞かせを開始しました。おはなし会では『赤い鳥』から1話、そして、「日本のアンデルセン」こと小川未明の作品から1話、合計2話の童話を読み聞かせさせていただきます。

小川未明は雑司ヶ谷に住んでいた時期があったのですが、小川未明の娘と小森さんの姉が青柳小学校の同級生で、小森さんの母親が小森さんを連れて度々小川家を訪れていたことから、小森さんにとっては思い出深い人物とのことでした。

このおはなし会も、まもなく200回を迎えます。毎月のおはなし会に関する情報は、豊島区の広報誌「広報としま」や豊島区ホームページで発信しておりますので、ご覧いただき、是非おはなし会にお越しください。

## 秋の歴史文化講座を開催しました

昨年度に引き続き、本年度も専門家を講師にお招きして、去る10月27日と11月10日に歴史文化講座を実施しました。今回は当館の建具金物とタイルに関する講座でしたが（「旧宣教師館だより第63号」をご覧ください）、今回は「マッケーレブが見た風景」と題し、マッケーレブを取り囲んでいた環境とはどのようなものだったのかを絵画や写真を中心に紹介しました。

### ①「宣教師・マッケーレブが見た日本—雑司が谷旧宣教師館所蔵の写真資料を中心に」（当館学芸研究員・小山勝美）

この講座では、所蔵の写真やマッケーレブの手記を紹介しながら「日本にいた時のマッケーレブが見た風景」をご紹介します。講師は当館職員の小山が担当しました。

まず、当館やマッケーレブについて改めて知っていただくため、マッケーレブの生い立ちや日本での活動をお話ししながら、それに合わせて関連する写真を見ていただきました。当館に所蔵されている写真は、マッケーレブの研究者が調査の過程で収集したもの、1989年の開館に向けて行われた保存修復工事の際に収集されたものが中心で、様々な方からのご厚意を受けたことから400を超える写真がこれまで寄贈されました。今回の講座では、マッケーレブの幼少期の写真、兄弟との集合写真、築地の外国人居留地にいた時の写真、マッケーレブと同宗派の宣教師たちの写真など、館内の展示で使用していない写真も含めてご紹介できる貴重な機会となりました。併せて、当館に収集された写真にはどういった傾向があるのか他館と比較して検討するため、日本に現存する宣教師館を保存している団体へ問い合わせをさせていただき、そちらの結果も紹介しました。それぞれの宣教師館がどのように使用されていたのか、例えば、当館のように個人の邸宅だったのか、それとも学校の先生たちの宿舎として使用されていたのか、などによって所蔵数や収集の過程など、各館によって差異が出てくることわかりました。共通していたのは、宣教師の肖像写真を持っているということでした。

次に、筆まめであったマッケーレブが残した文章のうち、仏教に関する記述をいくつかご紹介しました。日本の寺は一般市民の家よりも豪華であることが多く、これらは信者の自由意志で賄われているようだが、日本は貧困で疲弊している国なのにどうしてなのか、という疑問や、水天宮も自由献金がなされているが学生のための基金になっているらしく、（その点においては）偶像崇拜にさえも良さを見いだせる、と論じるなど、ストレートな批評を書いています。また、雑司ヶ谷鬼子母神について、その由来を説明するとともに、豊作の祭りが夜まで行われていることにより雑司ヶ谷学院の学生が勉学に集中できなかったことを取り上げて、やはり偶像崇拜はいけないものだ論じるなど、日蓮宗が根付いていた雑司ヶ谷の地で基督教の布教を行っていたマッケーレブの苦勞を感じさせる記述も残っています。



◀左から講座①、講座②の当日の様子。  
スライドを使用し、多数の写真・絵画を見ていただきました。

### ②「19世紀アメリカの自然と美術」（成蹊大学講師・人見伸子先生）

19世紀アメリカやイギリスの美術、また海外における日本文化の影響をいう「ジャポニスム」を研究されている人見先生には、マッケーレブが1861年生まれのアメリア出身者ということで、19世紀にアメリカの風景を描いたハドソン・リヴァー派についてご講演いただきました。

（以下は講演の要旨です。）

ハドソン・リヴァー派はニューヨーク州を流れるハドソン川流域の風景を描いた人たちの集まりです。ニューヨーク州といえばニューヨーク市が思い浮かびますが、市街地ではなく、山脈が広がる自然豊かな地域を中心に活動していた画家たちをこのように呼びます。

風景画といえばターナーやセザンヌなど、ヨーロッパで活躍していた画家たちが有名ですが、その中でもイギリスのターナーに影響されて自国の自然を描いたのが、ハドソン・リヴァー派の中心人物であるトマス・コールです。ターナーはロンドンに住みながら国内外へ旅に出てスケッチをし、それを基に様々な風景画を描きましたが、彼に憧れたコールや、その影響を受けた画家も、ニューヨーク州中部にあるキャッツキル山地を訪れてスケッチをし、絵を制作しました。

ヨーロッパの風景画は描かれた時代や描いた画家によって多種多様なバリエーションがあります。手つかずの自然の美をそのまま描いたものや、大自然を崇高に描いてキリストの存在を感じられるようにした宗教的な意味合いのあるもの、あるいは、雄大な自然とそれに対して無力な人間を描くことで物語性を出すような、ドラマティックな作品もあります。アメリカのハドソン・リヴァー派も、自然の美しさをそのまま描いたものや、実際に現地を訪れてスケッチしたものに自分で創作した風景を組み合わせたもの、宗教的な意味合いを感じさせるものもあれば、光や空気のニュアンスを表現することに重きを置いたもの、あるいは、時代が進むとよりネイティブな雰囲気求めてロッキー山脈などがある西部に向かう人たちが出てくるなど、それぞれ表現しているものが違います。

マッケーレブが生まれた年に発生した南北戦争が終結したあと、イエローストーン地区が世界で初めて国立公園として指定されるなど、手つかずの自然に関心を持つ動きが強くなります。絵画からも、マッケーレブが幼少期に過ごしたアメリカの雰囲気が伝わってきます。

以上が二つの講座の要旨です。ちなみに、人見先生のご講演では、《テネシー (Tennessee)》という絵もご紹介いただきました。開けた土地にゆるやかな丘が連なり、その間を川が流れている静かな絵です。ハドソン・リヴァー派はニューヨーク州を拠点としていましたが、どうやらこの絵を描いたワイヤント (Alexander H. Wyant) はテネシー州も訪れていたようです [1]。前号 (64号) でもマッケーレブの故郷について触れましたが、彼の生まれ育ったテネシー州のシェイディー・グローブという地は、名前のとおり暗い森のあるような田舎町で丘陵地帯だったということなので、もしかしたらこの絵のような風景が広がっていたのかもしれない。

絵画や写真には、風景や思いが記録され、現代の私たちにも当時の人々の暮らし、思い、時代性を伝えてくれます。マッケーレブがどのような時代に生きたのか、また、どのようにして生きたのかの一片を知る連続講座となりました。

最後になりますが、当館のアンケートにつきまして、お忙しいところ、各施設のご担当の方からご回答をいただいたことに対し、謝意を申し上げます。

脚注

[1] *American Paradise: The World of the Hudson River School*, The Metropolitan Museum of Art, 2013, pp.320-322.